短期留学生日本語プログラム　2021年度

石　﨑　俊　子

１．2021年度の概要

2021年度の短期留学生（NUPACE）日本語プログラムの授業は昨年に引き続き，CONVID-19の影響で春学期，秋学期とも全てオンラインの授業となった。

2021年度春学期はNUPACE単独の日本語クラスを初級から上級までの７つのレベル（NP１～NP７）で編成，NP１～３コースは週５コマで，NP１はゼロスタートから初級初期レベル，NP２は初級初期レベルから初級中期レベル，NP３は初級後期レベルであり，それぞれのコースは文法，聴解，読解，作文，会話などの技能を網羅しており，修了したものには５単位が認定される。

NP４～７コースは2021年度春学期より，技能別のクラスとなり，文法，聴解，読解，会話，作文に特化した授業がそれぞれ週１コマずつ，全学と合同のクラスとして開講した。受講者のニーズに合わせてクラスが選択でき，終了したものは各クラス１単位が認定される。NP４は中級前期レベル，NP５は中級中期レベル，NP６は中級後期レベル，NP７は中上級レベル相当の授業の内容である。

上記に加え，「漢字コース」は「漢字Ⅰ」「漢字Ⅱ」「漢字Ⅲ」の３科目（週１コマ），「入門講義」４科目（週１コマ）の受講も可能である。「漢字コース」は１単位，「入門講義」は２単位を認定している。これらのコースの詳細に関しては全学向けプログラムの報告を参照いただきたい。

2021年度の秋学期においてはNUPACEの受講者の不在によりNP３コースが開講されなかった。

２．成績評価

全学の評価基準に揃えてあり，下記の表のとおりである。出席率が70％以下の者に対しては59点以下の成績と同じくＦとなる。（表１を参照）

表１　成績認定基準

成績	成績評価（100点満点）
Ａ＋	95点以上
Ａ	94～80点
Ｂ	79～70点
Ｃ	69～65点
Ｃ－	64～60点
Ｆ	59点以下

３．受講状況

表２は春学期と秋学期のNUPACEの日本語コースの受講者数を示したものである。受講者数は春学期には短期留学生の41名中27名，また，秋学期は40名中28名とほぼ７割が日本語を受講している。受講者の延べ人数でみると，受講生が春学期に59名，秋学期は93名となっている。CONVID-19の影響により2020年度の受講者数は例年に比べ大幅に減少していたが，2021年度秋学期には受講数の回復が見られている。

表２　2021年春学期と秋学期の受講者数

日本語科目名	単位数	2021春	2021秋
		終了人数	終了人数
NP１	5	6	9
NP２	5	6（1）	5（1）
NP３	5	5	NA
NP４ 文法	1	2（1）	3
NP４ 読解	1	3（1）	3
NP４ 聴解	1	3（1）	3
NP４ 会話	1	（2）	3
NP４ 作文	1	2（1）	3
NP５ 文法	1	1	（1）
NP５ 読解	1	2	（1）
NP５ 聴解	1	2	0
NP５ 会話	1	2	（1）
NP５ 作文	1	0	（1）
NP６ 文法	1	1	2
NP６ 読解	1	2	8
NP６ 聴解	1	2	8
NP６ 会話	1	1	8
NP６ 作文	1	2	8

NP７ 文法	1	1	8
NP７ 読解	1	0	2
NP７ 聴解	1	2	2
NP７ 会話	1	2	2
NP７ 作文	1	1	2
漢字１	1	4（2）	5
漢字Ⅱ	1	6（2）	3
漢字Ⅲ	1	1	6（1）
合計		59	93

（　）内の数は，取下げ人数

４．今期の評価と今後の課題

2021年度はCONVID-19の影響により，再び全ての日本語の授業を春学期，秋学期ともにオンラインのみで行った。オンライン授業が２年目になり，教師も受講者もZoomの双方向の授業，またNUCTやGoogle Classroomなどのオンラインツールの使用にも慣れ，限りなく対面に近い授業が実施できたのではないかと思われる。受講者の授業評価アンケートの回答を2020年度のものと比較すると，対面の授業を切望する声は減少の傾向があり，概ね肯定的な回答が多いことから，オンライン授業に満足していることが窺える。

オンライン授業を実施することにより，従来の対面授業と比較して受講者のパフォーマンスの向上が見られた点がいくつかある。例えば，初級の日本語のコースにおいて，Google Classroomを使用して宿題の作文を提出するシステムに切り替えたことにより，提出率がほぼ100%に近いものとなった。また，コンピュータの画面が共有できることからペアやグループで同時に編集が可能となり，活動がしやすくなったなどである。対面の授業に戻ることは誰もが望んでいることであると思われるが，対面の授業になったとしても，受講者が教室にコンピュータを持参し，先述のようなオンラインでの活動を引き継ぐことにより，授業の質が向上し，受講者のパフォーマンスが更に向上するのではないだろうか。どのように効率よくオンラインでの活動を取り入れていくかはこれからの課題であると考える。